

1 国語科における「学びをつなぐ」とは

主体的に言葉と向き合う（言葉にこだわる）

既習の「言葉の力」を使って、新たな「言葉の力」の習得に向けて取り組んだり、学びの過程を振り返ったりする姿

自らの生活経験を出発点に

自分の知識や生活経験、仲間の考えを関連付け、自分の考えを再構成する姿

言語生活を豊かに

身に付けた「言葉の力」を日常生活に生かそうとする姿

学びを自覚

2 国語科の見方・考え方

言葉による見方・考え方を働かせるとは、児童が学習の中で対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること。

【言葉による見方・考え方を働かせている子供の姿の具体例】

○「ごんぎつね」の『ぐったりと目をつむたままのうなずいた』ごんの気持ち』では、兵十のごんに対する呼称「ぬすつとぎつね」、「ごんぎつねめ」であったのが、「おまい」に変化している。ごんは、親しみのある呼び方を聞いて自分だと気付いてもらえて嬉しかっただろうと想像する。

→登場人物の呼称に着目し、意味を比較することが効果的だった言葉への自覚が生まれる。

○「シダ」の性質から、森の奥に住んでいたのではないかと想像し、そこから、本当は1人でさみしかったからちよっかいを出していたのではないかと想像する。

→「シダ」に着目し、ごんの境遇や孤独さに気付いている。

3 国語科における「知識・技能」、「思考力・表現力・判断力等」

「知識・技能」・・・日常生活において必要な国語の特質に応じて理解し、それを適切に使うことができるようにすること

○言葉の働き役割 ○言葉の特徴やきまり ○語・語句・語彙 ○文の成分・構成 ○文の構造 ○表現の工夫

「思考力・判断力・表現力等」・・・日常生活の中で、人と人との関わりの中で、思いや考えを伝え合う力を高め、思考力や想像力を養うこと

○根拠となる表現を押さえながら文章の内容を読み取るようにする。

○文章の内容について自らの考えを整理し、筋道を立てて話せるようにする。

○相手を尊重したグループでの話し合いを取り入れ、他者との意見交流（聞き合う・話し合う・学び合う）を通して自分の考えを深められるようにする。

「学びに向かう力、人間性等」・・・言葉が持つよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養うこと

4 授業づくりのポイント

- ①子供の思いや気づき、問いなどを出発点にする（初発の感想など）
- ②自らの考えを再形成する場の設定（作品・友達・自分との対話や振り返り）
- ③学びが深まり学びが生きる言語活動の設定（相手意識・目的意識を持たせる）
- ④単元全体の中でどのような資質・能力を身に付けさせたいのか明確にする
- ⑤系統を意識する（学年・領域・単元・教材）
- ⑥どのような資質・能力が身に付いたのか見とり、その蓄積を評価に生かす

～○○○なるために、国語を学ぶ～

国語科学習授業デザインシート

授業者：金城 周子

1 育みたい資質・能力

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○共通, 相違, 事柄の順序など情報と情報との関係について理解することができる。(2) ア ○読書に親しみ, いろいろな本があることを知っている。 (3) エ	◎文章の中の重要な語や文を考えて選び出すことができる。 C (1) ウ ○時間的な順序や事柄の順序などを考えながら, 内容の大体を捉えることができる。C (1) ア	○学習の見通しを持ち, 文章の内容を比べながら粘り強く読むことで, 本から得た知識を友達に知らせようとしている。

2 本時について

単元名 『どうぶつの赤ちゃん』のすごいを, ひっしゃになってせつめいぶんにかこう!

教材名 『どうぶつの赤ちゃん』 増井光子

【単元計画】

(事前学習)・生活科の学習で, 自分の赤ちゃんの頃の様子をお母さんにインタビューしておく。

時	学 習 活 動
1	<ul style="list-style-type: none"> 動物の親子の写真を見せて, これまでの生活経験の中から, 気付いたことや知っていることを話し, 既有知識や既有経験を想起させる。 筆者から1年1組へのお手紙を読んで, 自分達も「動物の赤ちゃん」のすごいをを見つけ, 説明文を書いて伝える意欲を持たせる。 教師の範読を聞き, 「どうぶつの赤ちゃん」を読んで, 不思議に思ったこと, 気付いたことなどの感想や心に残った文を書く。
2	<ul style="list-style-type: none"> 文章全体の構成を捉える。(2つの問いと答え 事例①ライオン 事例②しまうま まとめ) 比べている観点を自分達で探し共有した上で, まとめがないことに気づいて見通しを持たせる。
3	<ul style="list-style-type: none"> ライオンの赤ちゃんの生まれたばかりの様子と大きくなっていく様子を, 動作化して実感的に理解しながら読む。新たな驚きや発見など感想や心に残った文を書く。
4	<ul style="list-style-type: none"> しまうまの赤ちゃんの生まれたばかりの様子と大きくなっていく様子を, 動作化して実感的に理解しながら読む。新たな驚きや発見など感想や心に残った文を書く。
5	<ul style="list-style-type: none"> ライオンとしまうまの赤ちゃんの大きくなっていく様子を比べながら読む。
6	<ul style="list-style-type: none"> 筆者が子供によく分かるように筆者の気持ちが表れている言葉に着目しながら, ライオンとしまうまの赤ちゃんは, なぜ, 生まれた時の様子や成長の様子が違うのか考える。 ライオンとしまうまの事例で, なぜライオンが先でしまうまがあとなのかについて考える。 増井光子さんになったつもりで, まとめの段落を書く。
7	<ul style="list-style-type: none"> 「カンガルーの赤ちゃん」を読み, ライオンとしまうまの赤ちゃんと比べながら読む。
8	<ul style="list-style-type: none"> 「動物の赤ちゃん」について, 知りたいことを調べ, 必要な言葉や文を書き抜いて, 自分なりの説明文を作る。(第6時で作ったまとめの文に, 新たな驚きや発見を付け足す。)
9	
10	<ul style="list-style-type: none"> まとめたものをクラスの友達と読み合い, 感想を交流する。

本時：『どうぶつの赤ちゃん』（5／10時）

目標：ライオンとしまの赤ちゃんが大きくなっていく様子を、動き方、乳を飲む期間、自分で餌を取る時期などの観点ごとに比べながら読むことができる。

【授業展開】

- (1) 導入
 - ・ライオンとしまの赤ちゃんの大きくなっていく様子の何を比べているかを考えながら音読する。
 - ・学習課題を確認する。
- (2) 展開
 - ・大きくなっていく様子を比べて、自分の考えを持つ。（個人）
 - ・どうして、生まれた時の様子や成長の様子に違いがあるのかについて考え、友達と考えを共有する。（ペア→全体）
 - ・叙述をもとに、自分の考えとそう思った理由を話す。
 - ・ライオンとしまの事例で、なぜライオンが先なのかについても考える。
- (3) 終末
 - ・ライオンとしまの赤ちゃんの大きくなっていく様子を比べて気付いたことや分かったことをまとめる。

3 授業者より

本学級の子供は、これまでに「くちばし」「うみのかくれんぼ」の説明的文章の学習を通して、「問い」と「答え」の文の対応に気づき、写真や挿絵をじっくり観察し叙述とつないで内容を読み取る学習を進めてきた。さらに、読み取ったことを生かして鳥のくちばしに関するクイズを作ってクイズ大会をしたり、生き物のかくれんぼの説明文を書いて一冊の本にまとめたりする活動に取り組み、伝え合うことの喜びを実感してきた。

しかし、鳥のくちばしや生き物のかくれんぼについて書かれた本から、大事な言葉を抜き出せない子供、大事なことは抜き出し文にまとめることはできるものの自分の言葉でいきいきと表現することが難しい子供がいた。実際に鳥をよく知っている子供や海の生き物がかくれる様子を見たことのある子供は、図鑑や資料に書かれていないことも付け加えたりしながらまとめていた。

自分の既有知識・既有体験を出発点に、子供の想像を膨らませ驚きや感動など実感を伴いながら理解することで自分の言葉でいきいきと表現ができるのではないかと考える。

本単元でも、以下の手立てを工夫して取り組む。

① 既有知識や既有体験とつなげる。

導入で動物の親子の写真を見せて既有知識・既有体験を想起させる。百獣の王としてのライオンのイメージに揺さぶりをかけ、問いを持ち説明的文章を読む。

事前に、自分の赤ちゃんだった頃の様子をお母さんにインタビューしておくことで、自分の成長とも比べて読むことができるようにする。

② 説明的文章を豊かに読む。

新たな驚きや発見など初めて知る喜びや感動など、実感を伴った理解をしながら読むことで、筆者の思いや考え、新たなものの見方や考え方に会い、自分の内面から考えを再構成することができるようにする。

③ まとめの段落を書く活動を取り入れる。

言語活動として、筆者の増井光子さんになりきってまとめの段落を書く。対話を中心に、一般化の学習を繰り返すことによって書き方という形式面だけではなく、新たな考えを捉え論理を捉えられるようにする。

国語科学習授業デザインシート

授業者：上地 真理子

1 本単元へ至るまで

2年生にとって文学的文章の学習は、本単元で3回目となる。4月には『ふきのとう』を学習し、登場人物になりきって音読することをねらいとした。また6月には『スイミー』の授業実践を行い、中心人物の行動を具体的に想像することをねらいとした。本単元『お手紙』でもスイミー同様に精査・解釈に焦点を当てて学習を進めていきたい。

2 単元で育みたい資質・能力

知・技	・身近なことを表す語句の量を増し、語彙を豊かにすることができる。
思・判・表	・登場人物の行動や会話からどんな表情、様子だったのかなど、二人の心情の変化に着目して具体的に想像することができる。
主体的	吹き出しを使って登場人物の気持ちを具体的に想像しようとしている。

本単元で育みたい資質・能力は「具体的に想像する力」である。登場人物の会話や行動に着目し、登場人物になりきって本作品を読み深めさせたい。登場人物になりきるためには、同化をさせなくてはならず、そのための方法として吹き出し法を使ったり、役割演技をしたりしながら、登場人物の気持ちを具体的に想像できるようにさせたい。

3 単元計画

時	校時	学 習 活 動
1	1	初発の感想を書く
2	3	感想一覧シートを見ながら、初発の感想を交流する
3	1	クラス全体で話し合いたい問いを決める（出てきた問いは7つ）
4	1	すぐに解決できそうな疑問とみんなで話し合いたい疑問に分ける
5	4	1・2の場面のがまくんとかえるくんの気持ちについて考える。
6	3	2・3の場面のがまくんとかえるくんの気持ちについて考える。
7	1	3の場面のがまくんとかえるくんの気持ちについて考える。
8 本時	3	4の場面のがまくんとかえるくんの気持ちについて考える。
9	4	がまくんになったつもりでかえるくんにお礼のお手紙を書く。単元の振り返りを書く。
10~12	1 5	シリーズのお話を読み、がまくんとかえるくんが主人公のオリジナルの絵本を作る。

4 本時の授業展開

単元名	登場人物になりきってお話を読もう (8/12)
教材名	お手紙 (光村図書2年下) アーノルド・ローベル作

単元目標	登場人物の行動や会話から具体的に想像することができる。
本時の目標	4の場面のかえるくんとがまくんの気持ちを想像することで、1の場面と4の場面での二人の気持ちの変化に気づくことができる。

- (1) 導入 ①前時の振り返り紹介 (6名)
 ②本時のねらいの確認「4の場面のがまくんとかえるくんの気持ちを考えよう」
- (2) 展開 ③4の場面の挿絵からがまくんとかえるくんの二人の気持ちについて吹き出しに書く
 ④ペア交流
 ⑤全体交流
 ⑥1の場面の時のがまくんとかえるくんの気持ちについて考える
 ⑦1の場面と4の場面を比べて、二人の気持ちがどう変わったか考える
 ⑧「ふたりとも」と「ふたり」の違いについて考える
- (3) 終末 ⑨まとめ・振り返り

5 授業者より

本時で身につけたい力は、4の場面のがまくんとかえるくんの気持ちについて具体的に想像することである。がまくん、かえるくんの挿絵に吹き出しをつけ、二人がどんなことを考えていたのか、登場人物の気持ちになりきって考えさせたい。その際に難しいのは、登場人物に同化させることである。

西郷(1979)は、同化体験とは、人物の気持ちになりきることだと述べており、異化体験とは、第三者として人物を見、感想を持つことだと述べている。そして同化体験、異化体験の両方を体験させることが文学を読む上で大変重要になってくると述べている。一般的に低学年は、作品に同化しながら読み進めていくと思われるが、意外と教室には同化できない児童が混在している。このような同化できない児童にとっても、登場人物の挿絵に吹き出しをつけて考えさせることは効果的だと考える。

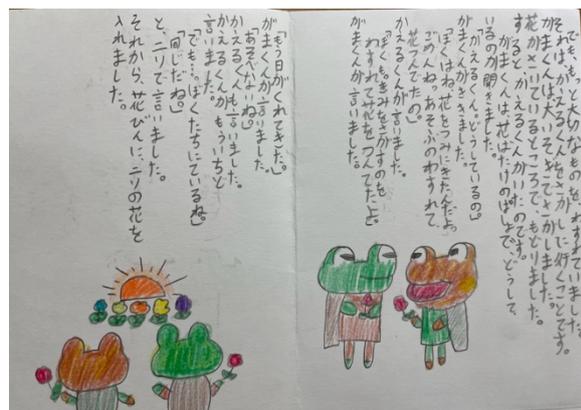
『文芸の授業』西郷竹彦(1979) 明治図書

6 授業後の子供たちの様子

第2次でがまくんとかえるくんの気持ちになって十分に考えた子供たちが、第9時で、がまくんになりきってお礼のお手紙を書いた。ある子のお手紙を紹介する。

「大すきなかえるくん。前のお手紙のおかえしだよ。きみのお手紙もとってもよかった。ぼくもさいこうのお手紙をプレゼントするよ。今度、お手紙のやりとりをやろうね。一生親友のふたり。きみの大親友がまより。」

次に紹介するのが、子供たちが考えたオリジナル絵本の一部を紹介する。



国語科学習授業デザインシート

授業者：我那覇 翔太

1 育みたい資質・能力

本単元では、一つ一つの言葉にこだわることを通して、自ら問いを立ち上げ、言葉を吟味する中でその言葉に対しての解釈を広げ深めたり、無意識に使っていた言葉に意味や効果を見出したりすることへのよさを自覚する子供の姿を期待したい。また、仲間（他者）と読み合うことでそれらがさらに深まることを実感できるような授業を目指し、国語授業で文学を学ぶ魅力や意義を子供に伝えたい。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使っている。(1)オ	「読むこと」において、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている。C(1)エ 「読むこと」において、文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げている。C(1)カ	粘り強く物語の全体像を具体的に想像し、これまでの学習を生かして、物語に対する思いや考えを伝え合おうとしている。

2 本時について

単元名 物語の全体像をとらえ、考えたことを伝え合おう

教材名 『たずねびと』 朽木 祥

【単元計画】(全 10 時間 + α)

時	学 習 活 動
1	単元全体の学習の見通しを持ち、題名からどんな物語か想像する。 作品と出会い、初発の感想や自分の問いを書いてまとめる。
+ α	「広島・原爆」についての調べ学習 → 再読 → 感想の追記
2	感想や問いを全体で共有し、もう一度自分なりの視点を持ってじっくり読み返す。
3	叙述を基に、物語の設定(時・場所・人物)を捉える。 問い:「綾」にとって重要な人物はだれだろうか?
4 5	登場人物の役割や「綾」との人物関係を考える。
6	物語全体を通した「綾」の変容と影響を与えた人物の言動や出来事について考え、物語の全体像を捉える。 問い:「綾」を突き動かしていたのは何だろうか?
7 本時	「楠木アヤ」という名前を指でなぞった時の綾の心情を想像し、物語の中で繰り返し出てくる「名前」について考えを深める。 問い:「綾」にとって「楠木アヤ」という名前はどんなものになったのか?
8	『たずねびと』という題名に込められた意味を考え、作品から伝わるメッセージを書いてまとめる。 問い:「綾」はたずねびとの「アヤ」に会えたのかな?
9	「綾」の帰り道での心情や「お兄ちゃん」との会話はどんなものだったのかを想像して、書いてまとめる。
10	物語を通して学んだことや自分の変容について、学習後の感想としてまとめ、考えたことを仲間と共有する。

本時：『たずねびと』（7/10時）

目標：名前を指でなぞった時の「綾」の心情を自分と同化させて考えることを通して、作品に繰り返し出てくる「名前」について自分の解釈を深めることができる。

【授業展開】

- (1) 導入 気になる叙述（第2時の共有時に子供から挙がった）「メモに書いた「楠木アヤ」という文字を、また指でなぞった。」を想起させ、本時の学習の見通しを持つ。
- (2) 展開 ①なぜ、「また指でなぞった」のか？を考え合う。

【気付かせたい視点】

○「また」ということは？ ○なぞり始めたのはいつだろう？

○「楠木アヤ」という名前に対する「綾」の変容（前時との関連付け）

（目に飛び込んだ→メモする・ながめている→指さす→また指でなぞる）

- ②なぞっている「綾」の思いを心内語として書いて表現し、書いたものを朗読し合い共有する。※挿絵やGoogleマップの活用
- ③作品に繰り返し出てくる「名前」という言葉について解釈を広げ深めあう。

【補助発問】「綾」にとって「楠木アヤ」という名前はどんなものになったのか？

【着目させたい叙述】

○P118L7「ポスターの名前が、（略）」○P118L12「名前でしかない人々（略）」

○P119L4「その名前に、（略）」○P119L6「夢で見失った名前にも（略）」

- (3) 終末 「名前」という言葉について広げ深めた自分の解釈を振り返りとしてまとめ、仲間と共有する。

3 授業者より

本学級では、これまでに「言葉にこだわる」ことを意識して文学の学習を積み重ねてきた。学習を通して、子供は一つ一つの言葉には作者の思いが込められていることを強く実感していた。同時に、言葉への解釈を広げたり深めたりすることのおもしろさに気づき、読むことを楽しんでいる姿が多く見られるようになった。一方で、ある授業場面において、グループでは活発に学び合っていたのが全体での共有となると停滞し、一問一答の単調な授業展開になってしまうという課題もある。これは教師側の課題であり、その改善のため「子供の問いや気づき」に寄り添い、それらを中心とした授業を目指し、個の学びと集団の学びを往還させることを強く意識したい。子供自ら立ち上げた問いと教師の思いや願いを上手く擦り合わせ、全体の対話が深まるような「連続性のある問い」の設定し考え合うことで、自らの読みや学びを深める子供の姿を期待する。また、1学期の実践では、類似する点が多い2つの教材を連続して扱うことを通して、学びを使う場を意図的に設定し、「学びの自覚」をより高められるようにした。その結果、単元終盤の読み深めたことを共有する場面では、2つの作品を比較しながら共通点やそれぞれの作品のよさを語る子供の姿や選書の際、題名や作家に着目することへのおもしろさに気付く子供の姿を見ることができた。「作品を比べて読む」「題名や作家に着目して読む」という読み方・学び方の良さを強く実感し、自覚している姿であった。本単元でも、単元の目標である「物語の全体像を捉える」ために活用できそうな既習事項を考える場面を単元導入で設定し、子供が自覚した学びを新たな学びへつなげられるよう働きかけたい。